

明専会の絆 Ⅱ 明専会の絆を拡大し大学支援を強化する Ⅱ

明専会 会長 小笠原 浩(情54)



新年明けましておめでとうございます。

明専会会員の皆さまにおかれましては、新しい希望を胸によいお年をお迎えのこととお慶び申し上げます。

昨年8代目の明専会会長に就任して、新たな年を迎えて飛躍の年にしたいという思いでいっぱいです。7

代目の高原会長には12年間にわたり明専会をリードしていただき今のような活性化された組織を構築していただきました。特に、母校／明専会100周年記念事業と明専会110周年記念事業については強いリーダーシップのもとで多大なる絆の強化を実現していただきました。

そのような中、昨年はロシア・ウ

クライナ問題をはじめとする世界情勢が混とんとした中でのスタートとなりましたが、日本経済全体の指標でもある日経平均株価は39,000円台をスタートとして5万円を超える時期を迎えて活性化した状況が継続しました。また、大阪万博の大成

功やインバウンドの拡大等により世界的にも日本のアピールができた年だったと思います。さらには高市内閣の発足により政治についても今後の安定が期待できる環境が整ったと思います。

一方、世界情勢は年々ますます不安定で破滅的な方向に進んでおり、ロシア・ウクライナ状況は相変わらず混とんとして終わりが見えない形であるとともに中国との関係も予断を許さない状況が続いています。

さて、明専会は1915(大正4)年に明専学士會として発会し、昨年11月14日に設立110周年を迎えました。2015(平成27)年に、明専会100周

年記念事業をスタートして、10年間、精力的に推進してきました。それらの事業内容の基本は、いずれも明専会会員の絆を育み、その強い絆と熱い母校愛で大学・学生を支援することでありましたが、会員の皆さまのご協力によって、当初に立てた目標を達成することができたと評価しております。

しかしながら、将来の大学を支える出生者数は70万人／年を割り込み少子化に歯止めがかからない状況が続いています。1970年代には200万人／年であったことを考えると1／3以下に減っていることになりました。また、理系人材の不足により製造業をはじめとする日本の世界における著しい競争力の低下の波を食い止めるためには大学の役割や期待も大きく変化していることを日々肌で感じます。

そのような中では、母校の生き残りをかけた明専会のバックアップが必要であると確信しています。大学と同窓が一体となって大学をより強いものにし、120周年、130周年事業に繋がる第一歩のしたいものです。

そのためには、もう一度明専会の

存在意義を見直すとともに大学との強い関係を築くことが大切です。今年には次のような考えを基本に活動したいと思います。

まずは、同窓の絆の強化です。定款にも「同窓の絆構築」を明記し名実ともに同窓メンバーがさらに強い絆で結ばれるように推進していきます。

次は、学生支援についてです。強力な支援を継続できる基盤を構築していきます。学長を中心とする関係者と密に情報交換しメリハリのある支援を行います。具体的には学生が日々学ぶ環境については、常に世界の最新の設備等が準備できるように協力していきます。

また、寄付活動についても大学基金と明専会の寄付につきましては目的や使途が異なります。有効な活動に使われるように大学と協業して推進していきます。

これらの活動により、母校支援と同窓の絆を益々強化する契機にしたいと考えております。明専会の会員であることにより、母校を支援できる喜び、母校の生き残りを感じ取れることこそが会員である最大のメリットになれることを願っております。